九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

天明狂歌壇の連について ： 唐衣橘洲一派を中心に

石川, 了

https://doi.org/10.15017/4741869

出版情報：雅俗. 4, pp.32-49, 1997-01-31. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

天明狂歌壇の連について

――唐衣橘洲一派を中心に――

石川　了

一

明和期に唐衣橘洲を中心とする数人のグループから始まった江戸狂歌は、四方赤良編『万載狂歌集』と唐衣橘洲編『狂歌若葉集』（以下書名は適宜略称する）が天明三年に刊行されるに及んで、江戸市中にその爆発的流行を見る。いわゆる天明狂歌がこれで、筆者もその流行を検証したことがあるが[注1]、そもそも江戸狂歌の詠み手に関しては、発生初期から身分・年齢・性別等を問わないサロン的性格があった。ところがこの特性も、天明に至るまでの狂歌熱の高揚につれて、指導する側とされる側が生じて変質し、ここに様々な狂歌グループ（連）が誕生することになる。いうまでもなく各連は本来敵対するものなどではなく、相互に親密な交流があった。ところが右二書が刊行された結果（厳密にいえば両書刊行のいきさつをも含む）、天明狂歌壇に主導権のようなものが生まれて、それを赤良一派が完全に掌握、橘洲一派は逼塞状態に陥るという、まさに対立的構図ができあがったとされる。以後狂歌壇の盟主として活動する赤良一派及びそれに近しい連の人々はひとまず置くとして、赤良同様当時の狂歌壇の重鎮であった橘洲を中心とする一派は、さながら敗残兵の如くに目され論じられることが極めて少ない。天明期を中心に、橘洲一派を主としてその実体と動向を検証してみようとする所以である。

二

天明三年より前の狂歌グループについてまずあげるべきは、寛政九年仲夏という後年の執筆ながら、橘洲の回想文（『狂謌弄花集』所収）に見える、安永期を指すとおぼしき左の一節である。

赤良もとより高名の俊傑にしてその徒を東（牛込中御徒町）にひらき、菅江は北（市谷二十騎町）におこり、木網南（京橋北紺屋町）にそばだち、予もまたゆくりなく西（四谷忍原横町）によりて、ともに狂詠の旗上せしより（下略）

方角は勿論厳密な意味ではなく、橘洲の住む四谷から見れば菅江は北の方角に住し、赤良の家はさらにその東寄りに位置するのでかく見立てたまでであるが、方角すなわち地域を基準に四グループに分けていることに留意しておきたい。

天明に入ると、元年はなぜか資料に乏しく、浜辺黒人が『初笑不琢玉』を編集刊行し、また板料を取って狂歌を半紙に摺ることをも試みていたこと（『狂歌栗の下風』）くらいしかわからないのであるが、その黒人とは本芝二丁目の本屋三河屋半兵衛のこと（『奴凧』）で、芝地域の中心的存在であった。

続く同二年になるとグループの活動がかなり明瞭になる。前年四月に剃髪隠居して芝西久保土器町の落栗庵に転居した元木網は、この天明二年は四の日に狂歌会を開いていたようで、一月の十四日二十四日にはともに赤良を含め三十余人（ただし各個人名未詳）が会している（『三春行楽記』）。また四月二十日には三囲稲荷に平秩東作や朱楽菅江ら三十人ほどが集まり、帰京する三井長年（豪商三井の一族）の描く指頭画を狂歌に詠み、「夏神祇」の題で狂歌を奉納、さらに見立て団扇画を題に狂歌を詠んでいる（『栗花集』所収。この時のことについては後述する）。そして十一月二十四日付けの「冬日逍遙亭詠夷歌序」（『四方のあか』所収）によれば、この時すでに「（吉原）京町何がし屋のあるじ（加保茶元成を指す）」の「五町（吉原）のうらなる逍遙亭」の他、「かはらけまち（中略）もとのもくあみが落栗庵」「本町二丁目の（中略）はらからの秋人がよきぬた庵」な

どで「月次の会たへずとなんありける」といい、ここでもまた地名が付記されている。

天明二年の狂歌作者たちといえば、赤良の五世団十郎贔屓の著『江戸花海老』（同年仲冬朔旦跋、本屋清吉刊）に、これまた地域別に多くの人々が列挙されている。これまで具体的な作者名があてられたことがないので、少し長くなるが補足しつつ次に引用する（地域の囲みと作者名の傍線及び括弧内は筆者の補記）。

此比師鯵（草屋師鯵）がことばをきけば、日本大きに狂歌はやり（中略）、なかんづくもとの木あみ此道に執心ふかく、ちゑのないしこれをたすけて、狂詠四方に盛んなり。先山の手にはあから、菅江、その流をくむ人々には、松風（峰松風）、竹藪（坂上竹藪）、よみ人しれた、雲楽斎、馬貫（腮長馬貫）、まん丸（藤のまん丸）、紀定丸、四ッ谷に橘洲、へづゝ入道（平秩東作）、かつほ（古瀬勝雄）、まん作（出来秋万作）、あめん房（蛙面坊懸水）、麹町に栗圃（十二栗圃）、麻布にみさうづ（小鍋みそうづ）、芝は名におふ浜辺黒人、隣海法師、丹青洞（丹青洞恭円）、品川に大木戸黒牛あれば、目黒に好田の清好あり、築地の海地に卜養がやしきの跡の卜川（北川卜仙）、つくばね（筑波根峰依）、洲崎の升屋に一気行なり（未確認）、深川にかきのぬけ殻（未確認）、本所に無銭、蟹子丸、日本橋には酒盛入道（酒盛入道常閑）、鬼守（嚢庵河原鬼守）、むき躬（未確認）、あたりに匂ふ三十一文字（未確認）、一ッ盃のみの直寝の類、本町に腹からの商人、大屋裏住、住吉町には三升が名をつけたりし風早のふり出し、薬研堀にはきねやのせん旨、柳ばしにはおも梶似足、神田に今富久（今福来留）、貸本人和流、板木ほり安、さくらのはね炭、小川町に地口有武、子の子の孫彦、ふし原の中貫、沢辺帆足の連、下谷に名高き卯雲先生、素庭（志月庵素庭）、はやがき（早書築良）、つく〳〵法師、浅草に末広（茶屋町末広）、朝手（紺屋朝手）、藪のいと成（未確認）、蔵前に梅の花笠、吉原にゑい夫人、橋場の庵に婆阿上人、わけて此道すきやがし算木有政、物事明すけ、秦黒つら、しかつ部真顔、油のとうじ

ねり方、あぜ道（畠野畦道）、昼おき（朝寝昼起）、もちつとこつちへよりかけい、川井物梁、酒茂成保（酒茂少々成保）、はてなき大連、其外大井のむさとした、白人（山手白人）のしらぬ玉だれの小亀は、いづれやんごとなき、軽少ならぬ（軽少ならん）方多し。されば十代の作者恋川はる町も酒の上のふらちと名のり、喜三二も手がらの岡もちとなりて、狂歌をよんで見たい記をあらはし、森羅万象も竹つゑ為軽の翁と改て、猶此道にわけいらん事を思ふ。（中略）幸なるかな市川三升も自ら花道のつらねと名のり、（中略）その門に遊ぶせんじやは通小紋のいき人と称し、その声をまなぶ誰やらも、菊の声色などゝつきたるよし、四方の評判とりぐなり。

この文章をいま少し検討してみると、注目すべきは木網・智恵内子夫婦（落栗連）を別格に扱っていることである。これは『狂歌師細見』（後述）に「江戸中はんぶんはにしのくぼの門人だヨ」とある如く、地域を越えて多くの門人を抱えていたからに相違なく、落栗連という連名も地域を反映していない個人ゆかりのものである。次に地域別とはいっても、山の手連だけは「その流をくむ人々」として、雲楽斎や紀定丸といった小川町の住人（『江戸方角分』による）などをもその一派に加えている。つまり山の手連もまた一部地域を越えたグループであり、「山の手にはあから、菅江」と併記されている如く、その中心は地域というよりは赤良一派（四方連）と菅江一派（朱楽連）という個人に根ざす二グループである。またこの山の手連と同じ最多の九人を掲げる数寄屋河岸一派（数寄屋連）は、「はてなき大連」とあってこれまた一大地域グループとわかる。そしていま一つ地域とは別に、戯作者グループがあげられていることも見落としてはなるまい。なお三升らの梨園グループには堺町連という地域にちなむ名称があるが、その町名を用いていないのは、本書が梨園全体ではなく住吉町に住む団十郎贔屓の書だからであろう。

以上をまとめるならば、江戸狂歌の連は基本的には地域中心ながら個人に根ざすものもあり、天明二年においては地域にこだわらない個人連の落栗連と、四方連及び朱楽連の両個人連を中核とする地域中心の山の手連、そ

れに地域をそのまま名乗る数寄屋連がその三大勢力で、戯作者グループについては地域を特定しがたいこともあってか、少なくとも赤良は別扱いしていることになる。また逐一明示はしないが、その土地柄からして山の手連は幕臣等武士中心、数寄屋連には町人が多く、落栗連は数寄屋連等の町人中心の地域連との重複が目立つ。念のために橘洲を中心とする地域連（四谷連）のメンバーを確認しておけば、平秩東作、古瀬勝雄、出来秋万作、蛙面坊懸水の四人であるが、東作と懸水は『狂歌師細見』の橘洲グループにその名がなく、特に東作は橘洲と同じ賀邸の門人ながら年齢的に大先輩（十七歳上）で、橘洲よりもむしろ赤良と親しいこと、よく知られている。

三

前述『若葉集』『万載集』の二書（ともに二巻二冊）の編撰は右のような状況下で行われた。その経緯については、すでに浜田義一郎氏によって、①『若葉集』の編撰は天明二年四月初めに終わった、②同年四月二十日の三囲稲荷狂歌会に赤良と橘洲の師である内山賀邸とその子置来も出かけたとすれば、『若葉集』の編集完了を祝う意味があった、③『若葉集』の置来序（実は賀邸作）は同狂歌会で依頼された可能性がある、④橘洲は同狂歌会で門人の組織作りを意図している、⑤疎外されたことを同狂歌会直後に知ったと思われる赤良は、対抗意識から同時刊行を目指して直ちに『万載集』編撰に着手した、⑥天明三年春の結果は『万載集』が『若葉集』を圧倒し、自ずと赤良が天明狂歌壇の盟主となった、おおよそ以上の経過が導き出されている。[注2] 両書の一件は橘洲及びその一派を考察するに避けて通れない問題なので、以下に私見を述べてみたい。

まず『若葉集』の編集終了時期は、それを述べる天明二年初夏付け橘洲序に「卯月のはじめ」と明示されているが、三囲稲荷狂歌会での詠の一部が『若葉集』にとられている。すなわち浜田氏が指摘された橘洲以外に、智恵内子・算木有政・古瀬勝雄の各狂歌が入集（四人とも『若葉集』下巻所収）しているので、同狂歌会以後に少なくとも下巻には手が加えられていることになる。また

同序によれば、編撰に平秩東作・元木網・蛙面坊懸水・古瀬勝雄の四人（置来序では二一天作を加えた五人）が協力したという。四谷連の前述四人のうちの三人に主流ともいえる木網が参画したことになる。これを橘洲一人で編集したと見るむきもあるが、両序ともに明記している上に、鹿津部真顔も「平原屋東作といふ人（中略）当国四ッ谷の大酒橘のみさへ（橘洲の初号―筆者注）と力を合せ、狂哥こん立の志をはげましけるに、大慈大悲の応護むなしからず、枯たる桜木に若葉集といふ詞の花咲出しかば」（『狂文宝合記』所収「戯作者の観音略縁記」）と記しているから、東作らが何らかの形で関与したことは間違いなく、『若葉集』入集歌数（後述）もそれを裏付ける。両序で協力者の筆頭に挙げられている東作がこの時期江戸にいたのは、二カ月ほどの伊豆旅行から帰った前年九月頃から伊勢大和路へ出発するこの年四月末までであることを考え合わせると、編集期間もこの八カ月程を大きく外れることはあるまい。

次に三囲稲荷狂歌会の性格であるが、この会ではすでに述べた如く、詠指頭画狂歌・「夏神祇」の奉納狂歌・見立て団扇図合せ狂歌の三部が作られている。その冒頭に付せられた賀邸の序は、指頭画と奉納の各狂歌を対象とした内容で、「けふこの狂哥のかず〳〵を、こたみ（三井長年が）京へなんのぼり給ふぬさ」にすると述べ、また

こゝにことばの玉手箱、ふたりみたりいひあはせたるよものあからは、はぎのかさありて、はれに腫たるあしびきのやまひありとてあづからず、すこしなめげなることばの憚あれど、よるならでひるへづゝ東作、月雪花をあけらかんこうとながめける風流のともがら、とり〴〵に鳥が鳴あづま橋をうちわたし、こゝかしこみめぐりの杜のあたりに、同じ小柴も見所のあるじまうけし、狂哥のむしろをしきて夏神祇といふ題もて人〳〵によませたり（下略）

とあって、この日の主催者が赤良（当日病欠）・東作・菅江の三人であることが明かになる。となると、この会を利用して橘洲が門人の組織作りを意図したとは考えにくい。延べ参加者三十一人（ただし全員が当日出席したとは限らない）のうち、『若葉集』編撰者及びその関係

者は賀邸父子を含めれば二十人にもなるが、その多くは木網系特に数寄屋連の人々であり、『狂歌師細見』の橘洲グループにその名が見える人物といえば、橘洲と賀邸を除けば古瀬勝雄・抜裏近道・十二栗圃のわずか三人である。

では八四〇首を収める当の『若葉集』入集者六十八人（「をしへ人」は椿軒にみなした）は、果たしてどのように分析できるであろうか。一〇七首の橘洲を除き、歌数別にその概要を示せば左の通りである。

A
- 五十首代　四人（平秩東作57・椿軒57・樋口氏52・元木網51）
- 四十首代　一人（四方赤良45）
- 三十首代　三人（渭明32・智恵内子31・古瀬勝雄30）
- 二十首代　三人（蛙面坊懸水24・朱楽菅江24・物事明輔20）

B　十首代　十人（ものごとのうとき19・出来秋の万作17・紀定丸16・算木有政16・古鉄の見多男13・草屋師鯵12・鹿津部真顔12・浜辺黒人11・五風11・馬蹄10）

C　一桁代　四十六人（うち約半分の二十二人は二首以下）

この人数配分を見れば、A二十首以上十一人、B十首代十人、C一桁代四十六人に大きく三分されていること明らかで、ABの合計二十一人という人数は、橘洲を除く六十七人全体のほぼ三分の一に相当する。また歌数からみると、A四二三首、B一三七首、C一七三首で、ABの合計は全歌数のちょうど三分の二、橘洲分を除けば四分の三をこえる。つまり約三分の一の人数であるABが、歌数の四分の三以上を占めているわけで、主要人物はこのABの人々とみてほぼ間違いあるまい。ところがこのAB二十一人のうちで『狂歌師細見』の橘洲グループにその名がある人物（賀邸はひとまず除く）は、古瀬勝雄・出来秋万作・古鉄見多男・五風・馬蹄の五人のみで、特に見多男にいたっては『若葉集』以外の天明狂歌関係書にまったくその名が見当たらない。これに『若葉集』ではCクラスの、前述三囲稲荷狂歌会のメンバー抜

裏近道（七首）と十二栗圃（六首）の二人（勝雄は重複）を加えても、その勢力はわずか六七人そこそこである。つまり地域グループの四谷連は存在しても、赤良・菅江の四方連・朱楽連といった、個人中心の唐衣連と呼べるようなものは、『若葉集』の時点ではなかったと思われるのである。このことについては後で再度ふれることにするが、もし仮にあったとしたなら、一〇七首という突出した橘洲の歌数と、自派の人々に対する配慮のなさのアンバランスが説明できない。明和以来の狂歌界の中心人物だった橘洲ではあったが、外向性・社交性に富む赤良と違って、同好者と端正典雅な狂歌を静かに楽しむ彼に、天明二年の時点で赤良が対抗意識を持つような派閥勢力があったとは思われないし、また作ろうにもできなかったであろう。前述の三大勢力に占められている江戸狂歌壇に対し、派閥意識というよりも橘洲が考える狂歌の姿を、置来の序（橘洲の序ではない）にいう「心あひたる友」の協力を得て示したかったのが『若葉集』だったと思われる。

『若葉集』に関連しては以上の他に、素朴な疑問が一、二残る。その一は『若葉集』編撰関係者たちが、前述の八カ月程の編集期間中、本当に赤良・菅江一派の人々に計画を隠し通せたのかという疑問である。元々赤良と親しい東作は、天明二年では一月五日以降四月一日まで頻繁に赤良と会っている（『三春行楽記』）し、同年一月に赤良は木網の定例狂歌会に二度も顔を出している（前述）。橘洲の出版計画自体は、恐らく四月の狂歌会以前に赤良の耳に入っていたと思われる。それが同狂歌会以後になって、急遽感情的とも思われる対抗策に走ったのは、自分に相談がなかった出版計画自体に対してではなく、赤良に悪感情を抱かせるような細部の情報が持ちこまれたからであろう。そうした情報提供者とは、あるいは『万載集』版元の須原屋伊八関係者ではなかったかと推測するが、詳しくは後述する。

いま一つの疑問は、『若葉集』の刊行時期に関してである。書名からしてその出版は初夏がふさわしいこと、いうまでもない。事実天明二年四月付け橘洲序には、「えりあつめたるざれうた、やつもゝちあまり、折しも卯月のはじめなれば、いやしげる栗のわか葉集と名づけ

て、梓にちりばめ侍るも」とあり、置来の序（年次等の記載なし）にも「此集の名の若葉のごとくにしげからん」とあって、素直に読めば天明二年四月刊行と錯覚しそうである。しかしその刊本の刊記には「天明三年癸卯正月穀旦」と明示されている。さらに『割印帳』を見るに、『万載集』（刊記は「天明三癸卯歳孟春吉日」）は天明二年七月以降十二月二十四日までのところに記載されていて問題ないが、『若葉集』は同三年二月十八日に「不時割印」として処理されており、刊行は「天明癸卯年二月」と記されている。二月の刊記がある本を筆者は未見であるが、正月や二月に「若葉」ではやはり腑に落ちないし、そもそも『万載集』に相当先行していたはずの『若葉集』の届出が、なぜ右年月日まで大幅に遅れたのであろう。天明二年四月初めにひとまず編集を終えた橘洲は、恐らく当初は自序に記した如く同年初夏刊行の予定だったと思われる。ところが四月二十日に三囲で大イベントが行われたため、その成果を取り入れようと下巻を再編集した結果、刊行時期を逸してしまったのではなかろうか。一方『万載集』の情報も、その後当然橘洲の耳に入ったであろう。もし来る正月に両書が刊行されれば、書名一つをとっても、正月の万歳を利かせた「万載」と初夏を想定した「若葉」では結果は目に見えている。かといって先に手がけた手前、赤良の後塵を拝する四月まで待つこともできず、橘洲は思い悩んだに相違ない。結局のところ、そうした橘洲に業を煮やした版元近江屋本十郎が、『万載集』の大反響を目の当たりにして、弱小書肆だっただけに見切り発車したのが真相に近かろう。『若葉集』については書名に限らず、とかくその無策ぶりが批判されることが多いが、それは完成した『万載集』と比較した結果論で、個人別編集などは確かに単純な編集のし方ではあるものの、この方が当時は珍しい編集方法であったことも事実であり、あえてそのように編集した理由があったはずである。

四

さて一大ブームとなった天明三年には、大小種々合わせて一気に十数部の狂歌関係書が刊行されたが、その中

に連やグループを明記した最初の狂歌作者名鑑が含まれている。『狂歌知足振』と『狂歌師細見』がそれで、いずれも稀覯本であったが、近時の新日本古典文学大系第八十四巻に中野三敏氏によって付録として収録された。

『知足振』には刊年の記載がなく、酒上不埒によるふり尽くしの序文に続き、「この序文、過し弥生の十九日、日ぐらしの里狂歌会の節、布袋堂の前にてひらひ候」ととぼける、版元普栗釣方（本屋清吉）の「卯のとし卯月のはじめ」付けの一文を付す。日暮里狂歌会のことは『巴人集』の天明三年春と思われる箇所に、「酒上不埒日暮里大会」として三首収められているので、右一文の年月は同年四月と特定できて刊行もこの頃と思われ、釣方に依頼された不埒が作者とみてよかろう。内容は連ごとに狂名のみを列挙したもので、

（スキヤ連）　五十九人
小石川連　十九人
朱楽連　三十二人
吉原連　十六人
堺丁連　二十四人
芝連　四十八人
本丁連　六十四人
四方連　六十四人

の八連（地域連六、個人連二）総勢三二六人を収める（ただし「スキヤ連」の名のみ原本にはないが、慶応大学蔵野崎左文氏写本に補筆されているのを採用した）。

『狂歌師細見』もまた刊記がないが、前述新日本古典文学大系の中野氏解説や、四方山人をもじった四万山人の跋文に「此ふみ月にあら玉の春のはじめの知足振、つくさぬ落葉をちよつとかく」とあることから、天明三年七月頃の成立刊行であろう。作者と版元については、同書式亭三馬旧蔵本の三馬識語に「これは鹿都部真顔大人、（中略）万象亭・滄洲楼（物事明輔）・平原屋（東作）三大人とはかりて戯作し給へるよし。板元は上総屋利兵衛也」（三村竹清氏『本之話』による）というのが正しかろう。[注3] 本作は装丁・内容のすべてが『吉原細見』のもじりで、二十の狂歌グループとその傘下の狂歌作者を、吉原の妓楼と抱えの遊女等に見立てる。四万山人跋文中に「是ぞ正真高名の残りあらざる自慢のはな」とあることや、同跋文前述引用部分からもわかる如く、先行の『知足振』に不備があることを窺わせるだけに注目されるのであるが、これまで十分に活用されてきたとはいいがたい。その理由は、狂名をフルネームではなく一部分

しか記さない人物が少なくなく、それもほとんどが仮名書であるために狂名の意味がとりにくくて特定しがたく、さらには架空の狂名や人名以外も混在している可能性があるからである。筆者は天明期の狂歌関係書を『栗花集』所収の小作品もふくめて六十余作、その全入集者を調査して『狂歌師細見』所収人物の比定を試みた。[注4] その結果ほぼ確認できた人数（代表者を含む）を各グループ代表者ごとに示せば（※印は『知足振』の連との関係）、

朱楽菅江　四十五人　※朱楽連中心で小石川・四方・本丁・スキヤの各連が混じる。

花道つらね　八人　※堺丁連中心で四方連が混じる。

四方赤良　三十五人　※四方連中心で本丁・朱楽・小石川の各連が混じる。

唐衣橘洲　二十六人　※『若葉集』入集者中心。

一風斎隣海　十五人　※芝・本丁の両連中心。

酒上不埒　十五人　※四方連中心で小石川・本丁・朱楽の各連が混じる。

蔦唐丸　二十五人　※吉原連中心でスキヤ・四方の両連が混じる。

置石村治　九人　※小石川連二人等。

浜辺黒人　二十八人　※芝連中心で本丁連が混じる。

元木網Ⅰ　三十七人　※スキヤ連中心で本丁・小石川の両連が混じる。

手柄岡持　五人　※戯作者に本丁連二人とスキヤ連一人。

普栗釣方　二十人　※四方連中心で本丁・スキヤの両連が混じる。

元木網Ⅱ　十三人　※顕著な傾向なし。

竹杖為軽　二十五人　※戯作者とスキヤ連中心

元木網Ⅲ　三十四人　※スキヤ連と本丁連中心。

の十五グループ（木網一派をまとめれば十三で、すべて個人一派）[注5] 三四〇人程になる。残る「性根玉や墨右衛門」（一本亭芙蓉花一派）と「どうけや百介」以下の四グループにはこれといった狂歌作者が見当たらない。

両書に見える人々のごく大ざっぱな関係を『知足振』

の連を中心にまとめれば、スキヤ連には木網一派が多いだけでなく竹杖為軽一派も少なくなく、小石川連は赤良・菅江・不埒といった赤良及びそれに近い各派と木網一派等の寄り合いの傾向があり、朱楽連・吉原連・堺丁連は、それぞれ菅江一派・蔦唐丸一派・花道のつらね一派が中心で、芝連は浜辺黒人一派と隣海一派、本丁連は木網一派と隣海一派が多く、四方連は赤良一派の他に不埒一派と普票釣方一派の多くが属している。そして『狂歌師細見』の、為軽と喜三二の戯作者二派と村治と橘洲の二派が、『知足振』にはない特異な存在と指摘できる。

五

さて本題でもあるその橘洲一派だが、まず連単位形式の『知足振』にはこれがない。一派がないどころか、三村竹清氏が「東作・橘洲・卯雲などの大家を何として洩らせしかを疑ふ」（大妻女子大蔵竹清氏筆写本識語）という如く、橘洲個人の名すらない。また竹清氏指摘の三人はまさに洩れている三大人といってよい。たまたまこの三人を書き忘れたなどとは到底思われないから、何か三人に共通する理由があるに相違ない。東作は早く『明和十五番狂歌合』にも参加している江戸狂歌壇最古参の一人であり、木室卯雲は江戸狂歌以前からの狂歌作者で、早く安永五年に家集『今日歌集』を刊行している元老格といってよく、赤良も前出『江戸花海老』で「下谷に名高き卯雲先生」と特別扱いしている。この二人を仮にどこかの連に加えるとすれば四方連であろうが、赤良の傘下とするにはその存在が大きすぎる上に、年齢的にも大先輩（東作は二十三歳上、卯雲は三十五歳上）である。加えてこの二人は自派グループというようなものを持たない。残る橘洲は赤良より六歳年長の江戸狂歌発生時における中心人物で、その存在は云々するまでもない。となると、橘洲もまた唐衣連として掲出できるような自派グループがなかったとしか考えられない。

では『狂歌師細見』の橘洲一派はどう解釈すべきであろう。同派を示す橘洲こと橘屋吉十郎が、『吉原細見』天明三年版に見える妓楼「あふみや善十郎」を念頭に置いたものであることは、暖簾の図柄が共通するだけでな

く、『若葉集』版元名が近江屋本十郎であることに明らかである。また「吉十」は橘洲の読み「きつじう」（『江戸花海老』）を利かせる。記載されている面々は橘洲を除いて全部で二十五人に特定できる。『若葉集』の入集歌数を冠して括弧内に狂歌作者名を付記すれば、

57玉椿・のきば・山路（内山椿軒）
㉚ふるせ・かつを（古瀬勝雄）
⑰でき秋・まんし・さくし（出来秋万作）
⑨きてき・よつや（四谷紀廸）
④はね道・大とろ（大泥のはね道）
13みたほ・ふるかね（古鉄の見多男）
⑦ぬけ浦・ちか道（抜裏近道）
⑥りつほ・十二（十二立圃）
5くもみつ・むあん（雲水無庵）
2たはた・もの成（田畑もの成）
9あふみ・本十（本重）
1黒つか・大小（黒柄の大せうひかる）
3ある人・山の手（山手ある人）

②風車（風車）
1水車（水車）
⑪五風（五風）
7一楼（一楼）
1一蛙（一蛙）
⑩はてい（馬蹄）
⑦きん江（錦江）
1眉長（眉長）
1うき木（浮木）
7ほはく（弾琴舎蒲苿）
1りきやう（里暁）
3馬にう（馬乳）

という人々になる。これらの内、椿軒こと賀邸を別格として除くとすれば、歌数を丸で囲った勝雄・万作・紀廸・はね道・近道・立圃・風車・五風・馬蹄・錦江の十人以外の十四人は、『若葉集』以外の天明期六十余作に一首も見当たらない。もちろん『江戸花海老』や『知足振』にもその名はない。つまりこの十四人は『若葉集』固有の人々であり、天明狂歌壇とはきわめて疎遠という他はなく、江戸狂歌における橘洲一派と呼ぶにはほど遠い。となると検討すべきは十人ということになるが、まず風車は入集歌数がわずか二首であるから、主要人物から外して問題あるまい。次に三囲稲荷狂歌会にも参加した勝雄・近道・立圃の三人は『知足振』にもその名が見え、立圃が小石川連、他の二人が朱楽連に属している。つまり三人とも、少なくともこの時点では橘洲一辺倒ではなかったようで、特に近道・立圃は入集歌数がCランクであることがそれを物語り、勝雄は東作同様この時は四谷住ということで編撰に協力したことが推測される。入集歌数でいえば、はね道もまた四首と最下位に近い。いま一人錦江は、実はこの名前では『若葉集』固有の一人に数えなければならないのだが、『蜀山人判取帳』によれ

ば牛込原町の婆阿その人である。婆阿ならば『知足振』小石川連の一人で、『狂歌師細見』菅江一派にその名があって、橘洲一派と重出していることになる。このように見てくるならば、名実ともに橘洲一派といえそうな人物はまたもや四人そこそこの少人数となり、『狂歌師細見』の橘洲一派なるものが、グループとして掲出せんがために、ことさらに『若葉集』からそれらしきメンバーをかき集めてきた印象さえ受ける。

以上狂歌作者名鑑二書と前述の三囲稲荷狂歌会及び『若葉集』の分析を総合すると、やはり唐衣連と呼べるような橘洲の個人一派は、天明三年正月前後の頃にはまだない、仮にあったとしてもきわめて少人数でしかなかったと思われる。

ところで右の『狂歌師細見』には、橘洲と赤良の確執に関連して「ぜんてへおこりはまちがひのすぢサ」、「中なほり　牛込（赤良）と四ッ谷（橘洲）のわけ合も、菅江さんはもちろん木網さんの取持でさつはりすみやした。これからみんな、会へも一所に出てあそぶのサ」とある。このあたりの事情については、天明四年の『万載集著微来歴』や狂歌歳旦黄表紙の『大木の生限』等四作、さらには『吉原大通会』『鎌倉太平序』といった狂歌壇に関わる黄表紙も口を閉ざしている。そこで当時橘洲一派と呼べるほどの個人グループはなかったとする立場から、以下に私見を述べたい。

『若葉集』は『万載集』と異なり作者別の編集で、柱刻なども下巻本文最初の十丁（入集者は赤良と知恵内子）を例示すれば、「一（〜六）　〈あから」に続き「一（〜四）　〈知恵のないし」の如くで徹底している。この作者別の編集内容が自派閥偏重との悪評は、橘洲一派が存在しないとなれば、その論拠を失う。となれば、まず赤良が不快に思うとしたらその歌数であろう。確かに赤良の四十五首は橘洲を除き五位で、菅江に至っては二十四首十位である（前掲ランク表参照）。しかしこと赤良に限っていえば、編撰協力者を中心とするAランクに次ぐただ一人のBランク四十首代である。また入集位置を見るに、上巻は巻頭が古参の坡柳（『明和十五番狂歌合』の一人）・椿軒・菅江の順で、巻尾は協力者の蛙面坊・東作・木網（最後）、下巻は赤良が筆頭で末尾が橘

洲自身となっている。橘洲は赤良を決してないがしろにしているのではなく、それなりに遇しているといわねばなるまい。『若葉集』は派閥意識というよりも橘洲が考える狂歌の姿を示すのが目的と前述した理由もここにある。そしてこの目的を端的に表すには、作者別編集の方がより効果的だったのである。しかし赤良が悪感情を抱いたことは間違いない。となるとその原因としては、「赤良ぬしこの頃ざれ哥にすさめがち」云々の詞書がある、赤良より甥の紀定丸が勝ると詠んだ橘洲の例の一首が浮上する。しかし考えてみれば、「この頃」とはいったいいつを指しているのかまったく不明で、赤良にそういう時期があった可能性も考えられなくはない。また赤良をけなしたのではなく定丸を誉めたとも解せよう。いずれにもせよ当事者なら何の意味かすぐに理解できたことであったろうが、少なくもこの一首が原因で急遽対抗策を打ち出したとは思われない。

では何が原因なのかといえば、右のことどもが結果的に悪し様に赤良に伝わったと推測する。前述の「おこりはまちがひのすぢ」とは、思い間違い・勘違いの意味で、このことを指しているのではないか。少なくとも橘洲に悪意がなかったであろうことは、天明三年夏頃に赤良の方から木網・菅江とともに橘洲を訪ねて、「から衣きつゝなれにし此やどにはるゞ過て夏のお出合」と詠んで（『巴人集』）和解していることから窺える。ではだれがそうした情報を伝えたかといえば、それは何としてでも『万載集』を出したかった版元の須原屋伊八の関係者、特に『奴凧』に見える番頭迂平の周辺あたりではなかろうか。赤良は『万載集』に続編を予告した手前、その『徳和歌後万載集』だけは須原屋から刊行したが、以後須原屋とは縁が切れていることからもそう思われる。

六

『狂歌師細見』以後天明五年春までの橘洲は、赤良編『灯籠会集』（天明三年七月成）[注6]、黒人編『狂歌猿の腰掛』（同年八月序）、木網編『落栗庵月並摺』（同年十一月）、赤良編『蜀山人判取帳』（同年頃成）、釣方等編『狂歌角力草』（天明四年正月）、菅江編『閏月歳旦』

（同年閏正月成）、鳴滝音人編『狂文棒歌撰』（天明五年正月）、赤良編『後和歌後万載集』（同）、菅江編『狂言鶯蛙集』（同）、赤良編の一枚摺『夷歌連中双六』（同）[注7]などにその名が見え、このうちの『猿の腰掛』と『落栗庵月並摺』には、『狂歌師細見』の前述十人中の五、六人が入集、『判取帳』には古瀬勝雄・馬蹄・婆阿（錦江）の三人が入る。また右の双六はここで詳述しないが赤良に近い人々のグループを知るに好資料で、十四の地域グループ一二八人一三三首を掲出する。

天明五年という年は、橘洲にとって記念すべき年となる。古瀬勝雄と飛塵馬蹄の編になる『狂歌あまの川』が七月に蔦屋重三郎から刊行されるからである。中本一冊わずか九丁の小冊で、七十二人七十二首と巻末に橘洲の三首を掲げる作だが、同年月付けの勝雄の序文を見るに、

ことし文月七日短冊竹のよそ人をまじへず、星にもかさぬ唐衣うらなくかたらふ人々、先生のもとにつどひて七夕を題にてよめるを一冊となし、狂歌天河と題し（下略）

とある。「うらなくかたらふ」に象徴される如く、ここに名実ともに橘洲一派が確立されたと見るべきであろう。編者の一人である勝雄は、二年前の『知足振』では朱楽連の一員とされていたが、『若葉集』に協力して以後急速に橘洲寄りとなっていったと思われ、四谷に住む馬蹄は『江戸花海老』にこそその名がないが、四谷連の一人としてそのまま橘洲一派に加わっていったと思われる。また七十二人の中で『狂歌師細見』の十人と重なるのは、右二人を除けば紀廸・大泥のはね道・抜裏近道の『若葉集』Cランクの三人のみで、他はすべて新顔である。右十人の半分は、やはり橘洲一派とは呼べない人々だったことになる。

同じ年の秋、江戸狂歌初の評判記『俳優風』が蔦屋から刊行された。橘洲・菅江・赤良の文字通り狂歌三大人の編で、四方・朱楽・スキヤ・ハマベの各連にまじって「橘洲連」「唐衣」などと、橘洲一派が初めて名実ともに明示される。採り上げられた人数は、四方連の八十四人には及ばないが、朱楽連と同じ三十一人で数寄屋連二十六人より多い（他は四谷連六人、浜辺連四人、連名ナシ三人で総計一八五人）。顔ぶれは紀廸とはね道が入っ

ていないが、三十一人中の水角奈志・黒顔末吉・若松曳成・看板釘抜を除く二十七人が『あまの川』入集者である。一層世代交替の様相を呈していく中で、後に橘洲が「予が門葉のみ」（『狂謌弄花集』）と豪語する尾張の人々が増えていくのが特徴的である。[注8]

これ以後橘洲は、東作編『狂歌百鬼夜狂』（天明五年冬序）、赤良編『下里巴人巻』（同年）、赤良編『三十六人狂歌撰』（同年か）、赤良編『狂歌新玉集』[注9]（天明六年正月）、宿屋飯盛編『吾妻曲狂歌文庫』（同）、蔦唐丸編『絵本吾妻抉』（同）、赤良編『狂歌千里同風』（天明七年正月序）、赤良編『狂歌才蔵集』（同年正月か）、『奉納狂歌三十六首』[注10]（同年二月）、飯盛編『古今狂歌袋』（同年）、飯盛編『画本虫撰』（天明八年正月）、鹿津部真顔編『狂歌数寄屋風呂』（同年春）といった諸作に入集していくのだが、折しも寛政改革が始まり、江戸狂歌界は狂歌四天王を中心とする町人主導の寛政期へと移っていくのである。

注

1　「狂歌の流行――江戸天明狂歌を中心に――」（『講座日本の伝承文学』第二巻、三弥井書店・平7）。

2　「栗花集について」（『大妻女子大学文学部紀要』10、昭53・3）や『大田南畝全集』第一巻「解説」（岩波書店・昭60）、「天明三狂歌集の成立に就いて」（『江戸文芸攷』〈岩波書店・昭63〉所収）など。

3　一般には、「作者頭取」に擬せられている平秩東作を作者とするが、『巴人集』天明三年秋から暮れにかけての箇所に、「此道すきやがしにて狂歌師細見とかいへるふみつくりしことなど思ひ出て」とある。

4　長谷川強氏編『近世の俯瞰』（汲古書院・平9予定）所収「『狂歌師細見』の人々」参照。

5　芙蓉花一派を「性根玉や」に見立てた背景には、芙蓉花が浅草観音に絵馬を奉納したことが関係しているようで、『俗事鼓吹』に関連記事がある。

6　この成立時期については、井上隆明氏『平秩東作

の戯作的歳月』二一九頁参照。

7　この双六には「四方春興」の角書があるので、春刊であることは認められるが刊年がない。しかし東作の入集歌に自分の年齢六十歳が詠みこまれているので、天明五年とみてよかろう。

8　天明狂歌壇における尾張の狂歌作者については、拙稿『『狂謌弄花集』の成立とその意義――翻刻の解題にかえて――』（「芸能文化史」14、平8・12）を参照されたい。

9　本作には赤坂連・小石川連・赤松連・小河町連・番町連・市買連・山手（惣）連・染井連・本町連・両国連・深川連・数寄屋連・飯田連・伯楽連の十四連が明示されている。なお橘洲は巻末追加の部の前に、当代著名作者の一人として狂歌を寄せている。

10　千阪廉斎書『江戸一斑』所収。